

(別紙1)

## 総括研究報告書

課題番号：29-19

課題名：妊娠期から始まる、自閉スペクトラムの母親とその子どもへの支援及びそれに関する心理社会的因子についての疫学研究

主任研究者名（所属施設） 国立成育医療研究センター

（所属・職名） こころの診療部乳幼児メンタルヘルス診療科・診療部長

（研究成果の要約） 子ども虐待と関係の深い母親の心理社会的要因として、発達障害傾向や衝動性が重要であることを明らかにした。育てにくさを持つ児とその母親への支援として、グループ指導・個別指導の介入研究のメタアナリシスを行い、児の対人相互交流はグループ指導・個別指導の両方で有意に伸びるが、「母親の児への情緒応答性」は個別指導でのみ有意に伸びることを明らかにした。実施したコホート調査のデータを解析し、乳幼児虐待のリスク因子として母親の発達障害傾向、若年、子どもの数が多いことなどが重要であることを明らかにした。胎児虐待防止の重要性について調査データをもとに提言を行った。本研究代表者は日本産婦人科医会主催「母と子のメンタルヘルスフォーラム」指導者研修会のプログラム作成・講師を担当することとなり、本研究で明らかになった育児困難を持つ母親の心理社会的リスク因子とそれに対する支援について研修プログラムに盛り込み、研究成果の均てん化を図った。また、厚生労働省子どもの心の診療拠点病院事業と子育てひろば全国連絡協議会の共催で研修会を開催し、研究成果の均てん化を図った。

### 1. 研究目的

本研究では、自閉スペクトラム症を持つ母親は、育てにくさを子どもに対して感じる場合、周産期から母子保健関係者が注意すべき点があるとの仮説を立て、世田谷区における母子のメンタルヘルスのコホート研究のフォローアップ調査を実施し、また、有効な支援方法を検討する。

### 2. 研究組織

主任研究者

立花良之（国立成育医療研究センターこころの診療部乳幼児メンタルヘルス診療科）

研究協力者

竹原健二（国立成育医療研究センター研究所政策科学研究部）

水本深喜（国立成育医療研究センターこころの診療部）

仁田原康利（国立成育医療研究センターこころの診療部乳幼児メンタルヘルス診療科）

### 3. 研究成果

2012年12月から2013年3月の間に世田谷区の全分娩施設で出産した母親を対象にコホート調査を行っており、そのフォローアップ調査を2017年度に行った。フォローアップ調査では1065名の有効回答があった。

子ども虐待と関係の深い母親の心理社会的要因として、発達障害傾向や衝動性が重要であることを明らかにし、Scientific Reports 誌に発表した (Tachibana et al., 2017)。

育てにくさを持つ児と親子の支援のメタアナリシスを行い、「児の対人相互交流」と「母親の児への情緒応答性」が支援によって伸びることの期待できる重要なアウトカムであることを明らかにし、PLOS ONE 誌に発表した (Tachibana et al., 2017)。また、育てにくさを持つ児とその母親への支援として、グループ指導・個別指導の介入研究のメタアナリシスを行い、児の対人相互交流はグループ指導・個別指導の両方で有意に伸びるが、「母親の児への情緒応答性」は個別指導でのみ有意に伸びることを明らか

かにし、PLOS ONE 誌に発表した (Tachibana et al., in press)。

胎児虐待防止の重要性について調査データをもとに提言を「子ども虐待とネグレクト」誌に行った (立花ら、2018)。

実施したコホート調査のデータを解析し、乳幼児虐待のリスク因子として母親の発達障害傾向、若年、子どもの数が多いことなどが重要であることを明らかにした (PLOS ONE 誌に投稿中)。また、自閉症のスクリーニングである Social Responsive Scale 日本語版の標準化を行った (Stickley, Tachibana, et al., 2017)。

#### 4. 研究内容の倫理面への配慮

本研究実施にあたり、国立成育医療研究センター倫理審査委員会の承認を受けた。